□講義科目（専門科目）

科目名	スポーツ人類学特論	２単位
担当者	吉田文久	
テーマ	スポーツの人類学的研究の成果とその文化的・社会的貢献について	
科目のねらい	＜キーワード＞ ①　人間　②　多文化共生　③　文化的特性　④　行為主体　⑤　フィールドワーク ＜内容の要約＞ 　世界各地には、近代化しないままの形で様々な土着の伝統スポーツが存続し、その土地に根差す文化として、人々の生活と一体化し、そこには、人間が生きる楽しみを創造する知恵が盛り込まれている。彼らが行為主体（Agent）として、その伝統スポーツを存続・継承する姿からは、現代におけるスポーツの主体者形成の問題はじめ、スポーツ現場で生じている課題を解決したり、地域の諸課題を解決するためのヒントを得ることができる。本科目では、スポーツ人類学のこれまでの研究成果及び研究方法を分析･検討し、自らがフィールドに出て調査し、記述する作業に取り組む。その作業をもとに、人間にとってのスポーツの意味、スポーツのもつ文化的価値について考察し、多文化共生の視点から主体性をもってスポーツの発展に寄与する行動について各自が提案する内容を集団で検討し、改めて自身の役割、社会貢献の仕方について確認することをねらいとする。 ＜学習目標＞ 1. 伝統スポーツがどのように伝承され、そのために、どのような工夫や努力がされてきたか民族誌を解読し、説明することができる。 2. スポーツ人類学研究の成果を批判的に分析し、自身が取り組む研究の目的･内容・方法について提示･説明することができる。 3. スポーツの行為主体形成の課題を理解し、その課題解決に向けて行動に移す方法を提示し、集団検討に基づいてフィードバックすることができる。 4. 多文化共生に向けてスポーツ人類学がどのように貢献できるか理解し、その具体的行動方法を提示することができる。	
授業の進め方	第 1 回　スポーツ人類学研究の意義とその歴史　＜学問論＞ 第 2 回　文化人類学との接点　＜他分野との接点＞ 第 3 回　これまでのスポーツ人類学の研究テーマとその成果　＜研究成果＞ 第 4 回　スポーツ人類学研究の成果に基づくスポーツの文化的特性（意義）とは（事例 1）＜日本の伝統スポーツ＞ 第 5 回　スポーツ人類学研究の成果に基づくスポーツの文化的特性（意義）とは（事例 2）＜世界の伝統スポーツ＞ 第 6 回　スポーツ人類学の研究方法としての文献研究　＜史料発掘＞ 第 7 回　スポーツ人類学の研究方法としてのフィールドワークとは(1)　＜参与観察＞ 第 8 回　スポーツ人類学の研究方法としてのフィールドワークとは(2)　＜フィールドノート＞ 第 9 回　民族誌的記述方法とは　＜目的･内容･方法＞ 第 10 回　各自の設定した研究対象に関する調査(1)　＜事前打合せ（対象者理解）＞ 第 11 回　各自の設定した研究対象に関する調査(2)　＜インタビューの実施＞ 第 12 回　各自の設定した研究対象に関する調査(3)　＜インタビューの補足＞ 第 13 回　調査の整理　＜整理＞ 第 14 回　研究成果の発表　＜発表＞ 第 15 回　スポーツ人類学の研究成果の文化的･社会的貢献の可能性　＜研究成果の貢献＞	
事前学習の内容学習上の注意	予習：該当する内容について、参考書などを熟読し、疑問点などを明確にして授業に臨むこと。 復習：授業内容を深めるとともに、不明確な内容については再度学習すること。 その他：授業には積極的な姿勢で参加すること。	
本科目の関連科目	スポーツ哲学特論、スポーツ史特論、スポーツフィールドスタディ演習Ａ、スポーツフィールドスタディ演習Ｂ	
テキスト	『フットボールの原点』吉田文久著、創文企画、2014 『ノールール』吉田文久著、春風社、2022	

参考文献	『スポーツ人類学入門』、K.ブランチャード、A.チェスカ著：大林・寒川訳、大修館書店、1988 『スポーツ人類学』宇佐美隆憲著、明和出版、2004 『教養としてのスポーツ人類学』寒川恒夫（編著）、大修館書店、2004 『遊びの人類学』亀井伸孝著、昭和堂、2013
成績評価方法と基準	プレゼンテーション 20%、課題レポート 30%、最終レポート 50%により総合評価し、60 点以上を合格とする。